

近代の予兆と挫折

——清代中期一知識人の思想と行動——

大阪市立大学大学院文学研究科教授

山口 久和

一、理念型としての「章学誠」

マックス・ウェーバによれば、人間の知的営為が近代的な学問知（Wissenschaft）として成立するためには、学問に従事することが経済的意味での職業として自立すること、学問の専門分化とその分化した仕事（Sache）への専念が行われること、学問の進展は常に漸進的に継続していくものであるが故に、近代的な学問知は宗教や芸術のように永遠不変の真理を要求することはできない、そして最後に、学問的認識は政治的価値や倫理的判断から自由で中性的なものでなければならない、以上の四点を近代的な学問知成立の必要条件とみなした。¹

筆者は示唆に富むウェーバの見解に触発されて、清代乾嘉期の学問の中に近代的な学問知の萌芽が認められること、特に章学誠の史学思想の中にもっとも明瞭なかたちで近代の学問知が形成されつつあったことを論じた。²ところでウェーバの上述の見解は、西欧の近代社会と市民社会の成立と裏腹の関係にある。すなわち近代的な学問知を成立させる四つの要件はまさしく近代市民社会の中ではじめて充足されるものであり、筆者がもし近代的学問知の成立を清朝乾嘉期に求めようとするならば、十八世紀後半の中国の前近代社会が近代社会へと脱皮しようとする痕跡をいささかなりとも指摘する必要があるであろう。この作業を抜きにして近代的学問知の成立云々を語ることは

¹ ウェーバ『職業としての学問』

² 「中国近世末期城市知識分子的変貌——探求中国近代学術知識的萌芽」『中国的現代性と城市知識分子』（上海古籍出版社、2004年）。

適切ではない。それならば、十八世紀後半の中国の社会と政治と経済全般にわたって近代の萌芽を一つ一つ拾い集める労を取るべきであろうか。いま筆者はその方法を取らない。その理由は、もとより筆者に中国の前近代社会を見渡すだけの力量がないことにもよるが、たとえ筆者にその力量があったにしても問題群は余りにも錯綜している。たとえば、甲論乙駁して未だ決着を見ない中国資本主義萌芽論争の例を見れば近代／前近代の問題は総論的方法ではアプローチ困難であるように思われる。錯綜する諸現象から苦労を重ねて不確かな一般法則を帰納するよりも、ここでもウェーバの方法論を援用し、章学誠その人を近代／前近代を分析する際の理想型 (ideal type) として用いてみたい。具体的には、章学誠を乾嘉期知識人の一典型と見なし、彼の思想と行動、理想と現実を細かに分析することにより、乾嘉期知識人一般を考察するモデルを提示してみたい。理想型としての「章学誠」は、袁枚や洪亮吉、焦循といった知識人たちが近代の予兆としてとらえる際の有効な物差しとして機能するはずである。

二、先鋭的な歴史観と斬新なテキスト理論

まずは最初の作業として、章学誠の思想をその形成基盤、すなわち彼の生活実態、価値意識、道德感情、政治的イデオロギー等の要因を一旦捨象して純粹培養してみるならば、おおよそつぎのようになるであろう。人間に関わるもろもろの事象は時間的継起の中でただ一回だけ生起するものであり、したがって歴史の中に永遠普遍の法則＝道を探求しようとするのは間違いである。歴史は道の具現の「迹」に過ぎず、道そのものではない。道（所以然）そのものは不可知な何者かであり、人間が知ることができるのは現にそのようにして在るあり方（所当然）だけである。とするならば、時間の中に継起する一回生起的事象を取り扱う歴史学だけが成立可能な知であり、経書に書き記された永遠普遍の道を探求すると自認する経学は、道の歴史性を理解していないという点で、かつまた六経が具備するものは「所当然」であって、不可知な「所以然」の道そのものではないことを忘れてしているという点で、二

重の過誤を犯している。¹

「六経皆史」の説として知られる章学誠の有名な言説はここから胚胎してくる。上で述べたように、もし六経が一時代の「史」（道の迹の記録）であるに過ぎないとしたなら、六経が伝える道の普遍性・無謬性は保証されることはできず、六経の権威に依拠してきた儒教、そしてその儒教をいわば憲法として擁護し続けてきた王朝国家（＝清朝）の存立根拠は根底から懐疑と批判に晒されることになる。ここでは「六経皆史」の言説は強力な儒教批判、国家批判として機能する起爆作用を秘めている。他方、章学誠は同じ「六経皆史」に拠りながら、先王が経書の中に説いた道よりも、時王（＝清朝皇帝）が現に定める実定法を優先させることを主張する。今度は反転して「六経皆史」が清朝統治の有効性と正当性を根拠づける支配のイデオロギーとして一役買っている。²このように「六経皆史」説は当代政治の峻烈な批判にもなり得るかと思えば、また反対に当代政治の賛美称揚にもつながる。この「両刃の剣」を鍛え上げた章学誠の思想的意図を測りかねて、倪徳衛(David Nivison)は当惑の言を漏らし、劉咸炘は二つの矛盾する政治的含意をなんとか矛盾なく調停しようと涙ぐましい努力をしている。³

現代のわれわれの目から見て、章学誠の思想として注目すべきいま一つの側面は、彼の言語観とテキスト理論である。彼によれば、理想の三代においては言語表現（言）と言語内容（意）は一致していたが、三代以降になると不幸にして言と意は乖離するようになった。諸子百家のさまざまな思想言説が生まれ、レトリックを駆使した詩人文人の文学作品が産出されるにいたったのは、この言と意の乖離に起因している。言と意が一致していた時代、コトバの理解はそのままコトバが表出しようとする内容の理解であり得た。しかし言と意が乖離してしまった後世にあっては、コトバの理解はそのまま即自的に表出内容の理解とはなり得ない。つねに言は意を裏切ろうとし、意は

¹ 以上の要約は、『文史通義』「原道上・中・下」篇ならびに『章氏遺書』巻九「与陳鑑亭論学」にもとづく。

² 以上の要約は、『文史通義』「易教上」「原道上・中・下」篇ならびに『章氏遺書』巻九「報孫淵如」にもとづく。

³ David Nivison、*The Life and Thought of Chang Hsueh-Ch'eng* (Stanford University Press, 1966)．劉咸炘『文史通義識語』。

言を超え出ようとする。言語表現という唯一の解釈回路を辿って言語内容に到達しようとする、またそれができると信じる人々（＝清朝考証学者）は素朴きわまりない言語観の持ち主である。それならば、言と意の乖離という不幸な言語状況の中で、言と意を結びつけるどのような方法があると言うのか。これに答えて、人間のコトバはつねに具体的コンテクストを伴う、と言う。¹ すなわち、人はある具体的な状況の中でその状況に合わせた発言をするものである以上、コトバの解釈は何よりもまずコトバが発せられたコンテクストの理解として遂行されねばならない。たとえ聖人のコトバであっても、何らかのコンテクストを伴っている。言い換えれば歴史的時間に制約されている。このコンテクストを無視して、無時間的空間の中で聖人の発言を解釈しようとするところに、不当な道のドグマ化という経学の宿病が醸成されてくると章学誠は言う。²

以上、章学誠の豊穡な理論をできるだけ切りつめて要約してみた。人間存在の歴史（＝時間）制約性という考えは、古代や中世の人々の心に巣くっていた無時間的円環的な歴史意識を突破した精神の地平において始めて現れ出てくるものである。また言語表現（verbal expressions）と言語内容（verbal contents）とが乖離しているという意識、すなわち他者を理解するということの困難さの自覚は、価値観や行動規範の均質なる農耕社会から共通の価値観や規範が失われるアノミー（anomie）を特徴とする近代都市社会への変貌の過程で鋭敏化されるものである。むろん彼の思想の中に、道家の言語不信論、王充の歴史観、南宋事功学派の社会理論といったさまざまな中国固有の思想的伝統とその影響を指摘することができるであろう。だがそれとともにヘーゲル流の歴史哲学、ヴィーコ流の社会理論、ヘルダー流の言語観といった西欧の近世／近代を彩る観念や思想との類似性や親近性をも強く印象づけられるのもまた事実である。だとすれば、章学誠の＜思想＞はまぎれもなく近代を予兆していると言ってもよいのではあるまいか。ところが章学誠を、抽象

¹ 章学誠は、コトバとコンテクストが随伴関係にあることを「有為言之」（礼記・檀弓）という表現で定式化している。詳細は、拙著『章学誠の知識論』（創文社、1998年）第六章を参照。

² 拙著『章学誠の知識論』（創文社、1998年）第三章を参考されたし。

的な思念の世界から乾嘉の具体的歴史的社会的状況の中に拉し来るならば、上に見た彼の思想の斬新さと生活実態の後進性との間に横たわる懸隔の大きさにわれわれは愕然とする。思想と生活のこの矛盾をどう捉えれば良いのか。性急に結論を急がずに、まずは従来の年譜や伝記研究¹では必ずしも明らかにされていない章学誠の〈生〉を提示することから始めたい。

三、宗族の紐帯と封建倫理の称揚

章学誠は浙江会稽嵒山の南の道墟鎮に生まれた。その生涯は漂泊に明け暮れ、郷里に落ち着くことはほとんどなかったが、彼は終生「会稽の章学誠」を自称した。章貽賢重輯の『会稽嵒山章氏家乘』六卷²によれば、章氏宗族は五代の時に福建浦城で起家した章仔鈞に始まり、北宋末に章綜が浙江山陰に居を遷し、南宋年間に到って章彦武が会稽嵒山の道墟に落ち着いた。章順徳氏が公開しているウェブサイトの「章氏世系図譜」³には、紹興嵒山祖として章蘋の名があり、その五世代後の章彦武の下に「遷浙江会稽」と注記している。章氏宗族の支族たる会稽嵒山の章氏は章蘋を始祖と仰いだことが分かる。章彦武の子の章頤の三人の男子から西宅、前宅、後宅の三つの房分が派生している。章学誠は後宅祖の章義の家系に連なっている。

明末の劉宗周は外祖父章穎の伝記の中で、「先生諱穎、字叔魯、号南洲、会稽道墟章氏、章于会稽旧為望族」⁴と記し、また清初の施閏章は「予過会稽道墟章氏、称廡仕者接跡、問其祖則忠憲（章仔鈞）」⁵と述べ、章学誠自身も「比戸万家、煙火相接、郷人推族之鉅者、無若道墟章氏」⁶と会稽道墟章氏一門の隆盛ぶりを伝えている。だが時代が乾隆期に降ると、道墟の章氏は「墟

¹ 倉修良・倉曉梅『章学誠評伝』（広西教育出版社、1996年）。

² 日本東京東洋文庫所蔵本を用いた。

³ <http://www.shoufa.cn.gs/zhangsource/stree/sxtu06_1.htm>

⁴ 『劉戡山集』卷十五「外大父章南洲先生伝」。なお章学誠は、章南洲穎を介して王陽明の学問が劉宗周に伝わったことを誇らしげに記している。『章氏遺書』卷二十三「家效川八十序」。

⁵ 『学餘堂文集』卷二「螺川章氏譜序」。

⁶ 『章氏遺書』卷十七「楽野先生家伝」。

里宗人不下万家」¹と、人数の点でなお江南の大姓としての体面を維持していたが、宗族内に貴顕達官を擁するわけではなく、さりとて世に著名な詩人文人を輩出するのでもなく、宗族の社会的名望は徐々に凋落傾向にあった。章学誠自身、「吾宗近世人文、則族祖大来、族兄鐘、族子世法、以詩古文辞、知名雍正年」²と郷里の先賢程度の章大來や章鐘を宗族の著名人として挙げたり、安徽安慶の堪輿家章淮墅を「吾宗豪傑士也」³と吹聴したりしなければならなかったことの中に、章氏宗族の衰退の実情が読み取れるであろう。

乾隆十六年（1751）、湖北沔城知県として赴任する父親の章鏞に従って郷里を離れて以降、章学誠は書院の主講を勤めるために各地に短期滞在したことを別にして、北京を主なる生活圏としていた。当時、北京には百家を下らぬ章氏が居住していたが⁴、北京の章氏も会稽の本宗と同様に「往事章族居京師者、物力豊饒、春秋歳祀、牲幣隆盛、礼物詳備、軒綺庭燎、優伶楽部、祭畢献酬、長幼尊卑、尽歡竟日乃散。至今長老、猶侈言之、可謂盛矣……今宗人居京師、声勢財貨、遠不如前人矣」⁵と、過去の栄光に較べて現在の衰微を嘆息しなければならないような零落の状況にあった。そこで章学誠は、族兄の章鱗とともに、かつて僞山章氏が隆盛であったころ北京で行われていた公会——春秋の祖先祭祀と同宗親睦会——を復活させた。この公会の趣意を説明して、「凡我父兄子弟、遠近昭穆、与茲会者、觀於主亜分職、尚徳尊齒、而敬老尊賢之義達矣。觀於同志相引、同道相徵、而勸善規過之法昭矣。觀於能者任勞、才者任事、而急公忘私之美著矣。得相贊、失相匡、喜相慶、災相恤、忠孝友悌、相与黽勉、道德樹芸、相与講究。公会人合之義、実与宗祠天属之仁、立法不同而同有裨於人倫之教」⁶と述べている。宗族の紐帯と相互扶助をなによりも重視し、宗族共同体の中で生活することが人倫の理想の在り方と見なした章学誠の考え方が如述にこの文章に反映している。西欧の法諺「都市の空気は人を自由にさせる」は章学誠とは無縁の考えであった。

¹ 『章氏遺書』卷二十「童孺人家伝」。

² 『章氏遺書』卷二十「童孺人家伝」。

³ 『章氏遺書』卷十三「天玉経解義序」。

⁴ 『章氏遺書』卷二十「童孺人家伝」。

⁵ 『章氏遺書』卷二十一「僞山章氏京師公会簿序」。

⁶ 『章氏遺書』卷二十一「僞山章氏京師公会簿後序」。

四、会稽章氏の宗族実態

清代の紹興府は山陰・会稽・蕭山・諸暨・余姚・上虞・嵊・新昌の八県からなり、その風俗は「勤儉好学、絃誦比屋、晋遷江左、中原衣冠之盛、咸萃於越、為六州文物之藪」¹と称揚されているが、実際には、紹興府下の各県は人口が稠密な割に耕地面積が少なく生活は決して楽ではなかった。「吾郷山水清遠、其人敏鋭而疏達、地僻人工不修。土之所出、不足食土之人」²と章学誠は述べている。僞山の章氏はこのような生活環境を改善しようとして、砂州で木綿を栽培したり山泉を利用して醸造を行ったりして、ともかく「会稽諸郷之最」たる利益を上げるにいたったが、宗族内の貧富の格差は開く一方であった。³族孫の章文欽は郷里で食えずに北京に行き、倉部の下僚を勤めていたが、儒業を以て世に名を顕すことが出来ないのを常々悔やんでいた。章学誠はこの文欽に、「古人不得行道、博徒売漿、無所不為、惟其所得為何如耳」と慰藉している。⁴科挙及第だけが男子の本懐⁵であった時代であることを思えば、章学誠の言葉は僞山章氏の知識人を取り巻く生活状況が相当に悪化しつつあったことを物語っているであろう。

僞山章氏には始祖章仔鈞の名を冠した家訓「太傅仔鈞公家訓」がある。⁶「忠君上」から始まり「除凶暴」に終わる全二十四箇条は、たいていの家訓や宗規が掲げるものと千篇一律の日常倫理が説かれており、その点で目新しいものはなにもない。ただ僞山章氏を含めて、紹興地方の宗族出身知識人の職業倫理を考える上で多少示唆に富むものがあると思われるので、家訓第八条「正術業」を一瞥してみたい。

まず全文を挙げると、「先王之世、民間俊秀者、列之黨庠州序之中。其次則務本耕農、力田稼穡、梓匠輪輿、行商坐賈。若舍此以外、如皂卒乃畀下之

¹ 嘉慶重修『一統志』卷二九四「紹興府」条。

² 『章氏遺書』卷十七「汪泰岩家伝」。

³ 『章氏遺書』卷十七「樂野先生家伝」。

⁴ 『章氏遺書』卷二十「童孺人家伝」。

⁵ 『儒林外史』馬二先生の言葉。

⁶ 章貽賢重輯『会稽僞山章氏家乘』卷一「祖訓」。

甚者、術業一差、設心自異、品流日汚、適足玷辱宗祖、貽笑大方。故名不載譜牒、身不与祭饗、可不畏哉」宗族の中心を、儒教的教養を身につけた士に置き、ついで農、工、商に従事する者までを宗族の構成人員とするが、奴僕や社会的身分の著しく卑しい者は宗祖を汚すものであるから宗譜に名を記載せず、宗族の祭祀にも参加させないと規定している。宗規一般について言えることであるが、宗族の社会的地位と威信を保持するために、宗族の上層に属すべき族人の身分に厳しい条件を設けている。いま、士と民との境界線上にあった人々の意識について考えてみるならば、おそらく彼等には社会的身分の下降に対する危機感、上層の士に対する疎外感と劣等感といったコンプレックスが共通してつきまとっていたに違いない。章学誠と同年（丁酉）の挙人である湖北応城の金澍の家は代々安徽歙県の望族であったが没落し、父金煥若の代になると読書人の体面を保って挙業を続けることが経済的に困難になってきた。やむなく金煥若は親孝行をするために読書人としての身分をみずから捨てて商業に従事し、仲兄は医業に携わることになった。しかし金煥若の心中にはなおも士大夫身分への強い執着心が消えずにあった。彼は自分の素志を実現するために末弟の聞雲に学業を続けさせ、家政が好転すると「凡師儒束修之餽、交游鎬紆之投、賓客文酒之会、先生（金煥若）皆資給之、略無倦色」と、聞雲の学資と交際費のすべてを一手に引き受け、期待を寄せるこの末弟が郷試に落第するたびに「無以下報先人」と嘆いた。そしてわが子には常々「償己之不得已而棄儒以服賈也」と教え諭した。¹日本の江戸時代（1600-1867）のように士農工商の身分が截然と区別されていた社会にあっては、そもそも金煥若の場合のような社会的上昇や下降ということは存在しなかった。身分階層間が流動的であった中国近世社会なればこそ、金煥若は焦燥と劣等感にさいなまれたのである。金煥若はまさしく身分的ボーダーライン上にいた知識人の典型であり、章学誠もおなじ意識と感情を共有する知識人の一人であった。

五、刑名師爺と錢穀師爺

¹ 『章氏遺書』卷二十三「金煥若封君七十生朝屏風題辞」。

清代において士の身分を制度的に保証してくれるものは挙人と進士の学位であった。¹ そうであればこそ、知識人は社会的上昇の階梯を登るために科挙に殺到した。進士の名額は一定していないが、清朝二百五十年間を通じて 115 回行われた会試²の毎回合格者は最大名 399 名（順治十二年乙未科）、最少 81 名（乾隆五十八年癸丑科）である。³ 多数の漢人知識人を朝廷や地方行政に迎え入れる必要のあった順治朝では、合格者数が大体 300 人を超えていたが、清朝の支配が確立した康熙朝以降になると合格者数は制限され、200 人未満が常態となった。この傾向は乾隆朝にいたって一層顕著になっているが、いずれにしても極めて狭き門であることに変わりはない。多くの知識人は社会的上昇の階梯から滑り落ち、また多くは登ることを断念せざるをえなかった。科挙の門から閉め出された彼等は知識人としての矜持を保とうとする一方で、生活という厳しい現実と直面した。こうした不遇知識人が向かった道は、学殖と世知に乏しい者は挙業（受験勉強）の初歩を教える塾師や館師といった下級教育者として世を渡り、多少声望でもあれば府州県学の教諭や訓導⁴となっていささかの体面を保った。この道とは別に、挙業とはまったく別物の実務的知識を一から勉強し直し、専門的職業人として世に立とうと志した一群の人々がいた。おもに彼等が習得したのは法律事務や税務に関する実務技能と知識であった。国家運営や行政の上で一等重要なこれらの実務的知識は科挙の際に問われることはなかった。「君子不器」という言葉に象徴されているように、進士や挙人といった「正途」から官に就こうとする官僚（士）に要求されたのは典雅な所作や古典の教養、詩文の創作能力であり、テクノクラートである必要は全くなかった。しかし実際の行政に当たっては、実務知識は必要不可欠である。だからこそ上は総督巡撫から、下は知府知県に到るまで、実務知識の保有者を私的ブレインとして抱え、実務を代行させ

¹ 何炳棣『科挙と近世中国社会』第一章（平凡社、1993 年）。

² 博学鴻儒科等の特科を除く。

³ 『明清進士題名碑録索引』（上海古籍出版社、1980 年）。

⁴ 訓導は秩従八品。歳貢生から昇格して任命、さらに翰林院孔目、州判、外府経歴、外県県丞、州学正および県教諭に昇格することができた。劉子揚『清代地方官制考』（紫禁城出版社、1994 年）、張徳澤『清代国家機関考略』（中国人民大学出版社、1981 年）を参照。

た。清初の陸世儀は「天子所与治天下者士人也。而士人所習。不過帖括制義。空疏無用之文。限其出身。卑其流品。使不得並于士人君子者吏也。而吏胥所習。錢穀簿書。皆當世之務」¹と、吏（胥吏）の社会的必要を認めながらも、士と吏の厳格な社会上の身分差別を説いている。顧炎武に到っては、「大抵官不留意政事。一切付之胥曹。而胥曹之所奉行者。不過已往之旧牘。歷年之成規。不敢分毫踰越」²と、このような官僚の無知と胥吏の文書主義が政治腐敗をまねいたことを厳しく糾弾している。ここで批判されているのが、俗に刑名師爺と錢穀師爺と呼ばれる人々である。彼等は主人たる幕主から「師爺」と尊称されるものの、その身分は明らかに士ではない。さりとて庶人でもない。この身分的グレイゾーンに置かれた彼等こそが十八、九世紀の知識人のエートスを代表していた。そして「吾郷……往往以治文書律令、托官府為幕客、蓋天性然也」³と章学誠が述べているように、僞山章氏の郷里紹興こそ師爺をもっとも多く輩出した土地であった。

『章氏遺書』巻十七、十八、二十、二十三等の家傳、別傳、序には、紹興師爺の具体的な姿が章学誠の筆によって描かれている。いくつか例を挙げて見てみよう。まず彼の身内では、十叔父の二子文沛と文泗は挙業に専念したがうまくゆかず、「則読律令、治名法家言、佐幕府県、咸能不負所学、為長吏所礼重。由是晚年、家以小康」⁴とある。刑名師爺として没落した家計をなんとか支え、特に弟の文泗は俸給の半分を兄に与えるほどこの道で成功を収めた。章学誠の友人であった山陰の蔣五式は、寧波兵備道馮弼の幕客として「刑名家言」をもって幕主に仕える刑名師爺であり、その父蔣四洲、叔父の蔣南衢も共に刑名師爺であった。南衢は幼い時から神童の誉れ高かったが何度も郷試に落第した。家産が傾いてきたので、「国子生」の身分を買い取り、挙業を放棄することにした。⁵その後、保定の虞氏の館師として子弟の教育に

¹ 『思辨録輯要』。

² 『日知録』巻八「吏胥」。

³ 『章氏遺書』巻十七「汪泰岩家伝」。

⁴ 『章氏遺書』巻二十三「十叔父八十序」。

⁵ この「国子生」は貢生、すなわち国子監で学ぶ権利を有する学生のことであり、下級官吏任用の資格を有するものと見なされていた。貢生の身分の売買はすでに明代から行われていたが、三藩の乱鎮圧の戦費を補うため、清朝政府は約二百両で貢生の肩

当たり、そこで得た金を元手にして按察使¹の官署に入り「文書律令」（法律事務）を一年間で習得した。近隣の州や県の招きに応じて法律事務処理にいかんなく才能を発揮したので、法律事務の煩雑な「劇郡大府」は争って彼を招致した。その結果、蔣南衢の声望はますます高まった。さらには、巡撫総督レベルの大官までもが彼を尊敬するようになったという。²宗稷辰の「幕学説」には、「習名法家、三年能佐郡邑治矣」³、刑名師爺の修業期間は三年とあるから、一年で修了した蔣南衢は相当優秀であったに違いない。彼は優秀であるだけでなく「宅心仁厚」の人物であり、裁判調書の作成には細心慎重であったので、「死囚頼公全活者、不可勝計」であったという。遊幕生活三十年、その足跡は天下の半ばに及んだ。ただここで注目したいのは、晩年、蔣南衢は子弟を戒めて「捭術不可不慎、不得已而治刑名書、慎勿恃聡敏、喜能時名」と諭している。これほどの成功者にしてさえなお、結局のところ刑名師爺の处世は「不得已」ものでしかなかったということである。⁴

刑名師爺を招く幕主の側からしても、彼等の知識は必須のものであった。もし断獄具詞（裁判調書）が令式に合致していなければ弾劾される恐れがある。孝豊知縣李夢登の判決文がまるで科擧の帖括文のようであったので、上司である湖北巡撫が「未閑吏事、宜亟求通律令能治文書者致幕下、庶幾佐君不逮」と誠告したところ、李夢登は「孝豊俸入歳不過五百金、不能供幕客食」と文句を言っている。⁵幕学の経典とも呼ぶべき汪輝祖の『佐治薬言』によれば、刑名師爺と錢穀師爺の俸給は他の師爺よりも一等高くて「月脩百兩」「歳脩千金」が相場であるという。歳入の乏しい僻県クラスでは師爺を抱えることは実質上困難であったことが分かる。また刑名師爺が必ずしも法令を遵守して法律事務を処理しているのでもない。たとえば詭道を用いて自白調書を

書きを売買し、以後慣例化した。何炳棣『科擧と近世中国社会』第一章 41-3 頁を参照。

¹ 刑名の実務を習おうとする者は、地方官であれば按察使の官署に、中央官庁であれば刑部の官衙に入って実地研修するのが普通である。『章氏遺書』卷十七「汪泰岩家伝」を参照。

² 『章氏遺書』卷十七「蔣南河先生家伝」。

³ 葛士濬『皇朝経世文統編』卷二十三「吏政」八。

⁴ 『章氏遺書』卷十七「蔣南河先生家伝」。

⁵ 『章氏遺書』卷十八「書孝豊知縣李夢登事」。

速成しようとするところがある。寧波兵備道の馮弼が担当したある事件で訴状に疑わしい点があった。そこで幕客（刑名師爺）は「用術誦之」、甘言をもって被告をだまし判決に都合の良い供述を引き出すことを勧めた。馮弼が幕客の言う通りにしたところ、被告はまったく納得しない。自らの誤りに気付いた馮弼は尋問を止めてしまった。幕客は馮弼を咎めたが、彼は「予生平未嘗一語欺人、適用誦、不覺内媿故也」と答えたので、幕客は馮弼に敬服した。¹章学誠の筆は馮弼の美談を叙述することを主眼としているが、おそらく刑名師爺の実態はこの馮弼の幕客の通りであったのであろう。繁文縟礼の最たる法律事務を手取り早く処理してくれる。それがたとえ不正な方法であったとしても重宝この上ない。幕主と幕客の馴れ合い、それが社会に及ぼす悪影響を章学誠は知悉していたはずであるが、批判の言葉は残念ながら彼の筆下には見られない。

刑名師爺と並んで幕主が争って招致したのが錢穀師爺である。名前が示す通り、収税業務全般を処理する専門職業人である。章学誠は同郷の先輩でありかつ座師であった梁国治の言を引いて、「夫刑名不慎、不過殺一人、所殺亦必有数人、且亦人所共知。錢穀而不慎、当時不覺、近数十年、遠或至数百年、常有無窮之人、被其流毒、而不知所自也」²と、錢穀師爺の重要性を述べている。この錢穀師爺も章学誠の交際圏にいた。寧波兵備道馮弼の幕府にいた馮邵と馮秋山である。³ちなみに、この馮弼のように幕主は自身の親戚身内を幕客として抱えることが多かった。

先に引いた陸世儀は錢穀師爺についてもこう述べている。「錢穀簿書」は世を治める必須の知識であるが士大夫には本来的に欠けている。したがって錢穀を扱う胥吏は社会的に必要である。だがあくまで士人君子と同列に並べべき存在ではない。胥吏にはせいぜい識字者程度の者を任用すればよく、また三年を限って交替させ再雇用は行わない。そうすれば「官日智而吏日愚」——官人が優位に立って胥吏をコントロールできるという。⁴陸世儀の念頭に

¹ 『章氏遺書』卷十七「湖北按察使馮君家伝」。

² 『章氏遺書』卷二十一「梁文定公年譜書後」。

³ 『章氏遺書』卷十八「馮瑤巽別伝」。

⁴ 「天子所与治天下者士人也、而士人所習、不過帖括制義、空疏無用之文。限其出身、

あったのは中国近世社会に顕著であった胥吏の害毒であったはずである。同様の議論は顧炎武も行っているが、「今戸部十三司胥算、皆紹興人」¹と指摘されるほど、章学誠の郷里は胥吏の産地であった。幕主から重宝がられはするものの、一種の社会的必要悪と見なされていた彼等の心境は複雑であったろう。寧波兵備道馮弼の錢穀師爺であった馮邵と馮秋山は、みずからの職責を卑賤なものと考え、幕学について人と語ることを憚った。²また先に触れた蔣南衢が子弟に刑名師爺の処世は「不得已」と教え諭していることからも彼等の屈折した意識を理解できるであろう。

同郷の後輩の李慈銘は、「大凡子弟不能読不能耕者、即当令共習賈、切不可覬食官司、游行公署。蓋矣一入此中、則卑官小吏之習氣、沾染終身不能自拔、不特依人難久、終成餓殍、且將拳家漸漬、敗壞風俗。今抽釐捐餉之局、遍於天下。其浚億兆作苦之脂膏害猶淺、其群千萬游手之子弟、害為深耳」³と、郷里の子弟が胥吏になることを厳しく戒めている。李慈銘は師爺の立場に身を置いたことがなかったからである。⁴しかし自らの生活圏と交際範囲の中に多くの師爺を持ち、「卑官小吏之習氣」を親しく見聞していたはずの章学誠には李慈銘のような考え方は無縁であった。それは彼自身が一種の師爺的存在であったからにはほかならない。

六、放浪生活

「二十歳以前、性絶駘滞、讀書日不過三二百言、猶不能久識」⁵と自らの鈍才ぶりを自認する章学誠も、乾隆四十三年、ようやく四十歳で順天郷試に合格、翌年、進士になった。順位は第二甲五十一名であった。周知のように、清制では第一甲第一名は翰林院修撰、第二名第三名は翰林院編集に除せられ、

卑其流品、使不得並于士人君子者吏也。而吏胥所習、錢穀簿書、皆当世之務。士人共治天下、則所当親也。(中略)其吏胥則惟用識字者。取其足備書写而已。仍三年一換。已經充役者、不得復入。如此則官日智而吏日愚。可無舞文弄法之弊矣。『思辨錄輯要』

¹ 『日知録』「吏胥」。

² 『章氏遺書』卷十八「馮瑤嬰別伝」。

³ 『越縵堂日記』同治八年十月十五日条。

⁴ 同治六年、李慈銘は一度だけ湖北学政張之洞の幕府に入ったことがあるが、わずか一ヶ月で辞めている。(『越縵堂日記』同治六年十二月初六日条)

⁵ 『章氏遺書』卷九卷「家書六」。

二甲三甲の進士は庶吉士に選ばれるほかは、本班としての知県に補せられるのが原則であった。だが知県の官缺には限りがあるので、吏部で補職されるまで待機しなければならない。章学誠はこの「帰部待銓」待遇であった。結局、彼は補職されることはなかった。みずから望んでそうしたのである。だが任官しなかったがために、伝記作者をして「晩景貧病交加、極文人之不幸」¹と言わしめたほどの極貧の放浪生活をその後の章学誠は送らねばならなかったことを思えば、彼が任官を辞退した理由ないしその間の事情について多くを知りたいと思うのが研究者の人情である。しかし年譜や章学誠伝はその点については何も教えてはくれない。

この間の事情については、章学誠自身が明言を避けている。「十年遠客孤寒、一旦身登上第、服官以後、事与寒素殊科、外有応酬、家増日用、精神疲於酬酢、心力困於借籌」²というような発言から推測するならば、任官してからの気苦労や上役同僚との交際の煩わしさが疎ましかったのであろう。しかしもっと切実な理由があったと思われる。そもそも彼には官界を遊泳する処世の術と自信がまったくなかった。後年、幕主であった畢沅に宛てた書簡の中で、「鄙人既無白氏之詩、而有羅隱之貌、坐困於世、抑其才也」³と告白している。五代の羅隱もかくばかりかと思わせるほどの醜い容貌であったことは、沈元泰の「章学誠伝」や雪橋詩話に引く謝蘊山の詩にも言及がある。⁴なお悪いことに、みずから「学誠天性、不工韻言」⁵と言い、「鄙人於詩無能為役」⁶と認めるように、章学誠は知識人社会の最も重要な社交技術である作詩がまったくの不得手であった。その証拠に、彼の文集中を探しても、詩といえば「丁巳歲暮書懷投贈賓谷軫運因以誌別」ただ一首があるだけである。晩年の逸話であるが、兩淮軫運使の曾燠の宴会に列なったことがあった。曾燠は、兩淮軫運使の先輩であった盧見曾に倣って多くの著名詩人を幕下に集め、かつて世に華々しく喧伝された揚州の文人雅集を今の世に再興しようと企て

¹ 『碑伝集補』卷四十七・沈元泰「章学誠伝」。

² 『章氏遺書』卷二十九「与史余村論学書」。

³ 『章氏遺書』卷二十二「上畢撫台書」。

⁴ 『碑伝集補』卷四十七・沈元泰「章学誠伝」、『年譜補正』320頁。

⁵ 『章氏遺書』卷十三「陳東浦方伯序」。

⁶ 『章氏遺書』卷十三「吳澄野太史歴代詩鈔商語」。

た文化人である。当然のこと座興の一つとして、籤を引いて韻を決め作詩を競うことになった。章学誠には「盛」字が課せられたが、彼には韻語が綴れない。そこで「盛」字を用いて「八座雲説」なる散文を書いて責めを塞いだという。¹ どうかや章学誠はこの逸話を自慢しているようだが、章学誠の興ざめの散文を目にして曾燠やその幕客は鼻白む思いであったろう。容貌の醜悪、詞藻の欠如とともに、章学誠には文化人に必要な社交上のセンスというものが決定的に欠けていた。おそらくそのことは彼自身も気づいていたに違いない。拙を守って生きていこうと決意した理由がよく理解できる。

いま一つ、彼が任官を断った理由ないし事情があったように思う。それは彼の父章鑣に関係している。まず『僞山章氏家乗』²にもとづいて章鑣の人となりと事跡を見てみよう。章鑣、字は驥衢また双渠、号は励道また岩旆、乾隆七年（1736）に挙人、十六年（1742）に進士に合格、順位は第三甲二百三十名。乾隆十六年（1751）湖北応城知県となり、二十一年（1756）致仕、そのまま応城に留まり、三十三年（1768）応城にて客死している。応城での治績は「愛民恤士、政声卓著」と記している。まずは良心的な知県であったことが分かる。ところが章鑣は任官五年で致仕し、再任もされずにそのまま応城に留まったというのは異例に属する。しかも秩満ちて致仕したのではなく、どうかや疑獄の判決を誤った結果の免官処分であった。³ このような事情があったので、後任の知県からも疎んぜられ、応城の縉紳社会で生きていくのに辛酸を嘗めつくしたと想像される。わずかに章氏の生計を支えたのは、近隣の書院⁴で主講を勤めて得られる収入とかつての受業生の援助があったから

¹ 『章氏遺書』卷二十八「八座雲説、為曾使君作」。

² 『章氏家乗』卷五「驥衢公像贊并序」。この「序」末に宗孫章貽賢のつぎの識語がある。「謹査、実斎公嘗輯本支家譜、当有公行実。今文集不載、必已遺失矣。茲照応城県志名宦事跡、略述梗概云。宗孫貽賢謹志」。先君の「行実」という、子たる章学誠にとって一等重要な文章が遺失したというのである。「遺失」には何か作為のようなものが感ぜられる。

³ 朱筠『笥河文集』卷十六「祭章学誠之母史孺人文」、『兩浙輟軒録』卷二十二引「行述」。

⁴ 『嘉慶重修一統志』湖北省德安府条に拠れば、「応城県学、名額十五名」とあり、その他、徳安府全体では私立の書院として、漢東書院、夢沢書院、蒲陽書院、摘珠書院、永陽書院があった。章鑣が主講を勤めたのは県学以外の私立書院であったろう。

である。¹『章氏家乗』は「卸事後、邑人攀縁不舍、聘留主講書院。暑夜作大帷、篝燈課讀、造就多知名士、著作甚富」と章鏞の教育者としての実績を誇示して見せるが、内実は極度の困窮生活であった。そうであればこそ、郷里の会稽にも帰れず、同郷互助組織のあった北京にも行けず、応城で客死しなければならなかったのである。さらに不幸なことに、死後、棺を祖先墳墓の地にまで送り届ける路費もなかったため、やむなく湖北転運使管轄下の官船に便乗させてもらい、北京に棺をはこんだのである。²

章学誠は章鏞の応城赴任時から付き従い、父が罷免されてからもなお四年の間応城で生活を共にした。知県という職責の難しさと、父親の悲惨さを身にしみて実感したはずである。それが心の外傷となって、彼をして知県に任官することを躊躇させたのである。章学誠の任官拒絶の態度は徹底している。進士及第から九年後の乾隆五十二年（1787）、わざわざ吏部に「投牒」して任官辞退の意向を伝えている。この間、ずっと補職されるのではないかと「心惴惴恐其得也」であったという。³この頃すでに彼の生活は困窮の度合いを増していたのであるから、それでもなお任官を欲しなかったというのはよほど思い詰めた気持ちがあったのであろう。結局、章学誠は望み通り無官の境涯を得ることができたが、その代償として世活の糧を求めて漂泊を重ねるといふ過酷な人生を背負い込まねばならなかった。

七、書院主講

章学誠の放浪生活は、四十四歳の乾隆四十六年（1781）、提督河南学政の邵洪を頼ったがうまく行かず、やむなく進士同年の張維祺を直隸肥郷県の知県官署に訪ねて清漳書院の主講の職にありついたので始まり、嘉慶六年（1801）、六十四歳で郷里の会稽に没するまで二十年の長きにわたって続いた。

いずれも小規模な無名の書院であり、主講の報酬は低かったに違いない。

¹ 『章氏遺書』卷二十三「金煥若封君七十生朝屏風題辭」。

² 『章氏遺書』卷二十二「滄雲山房乙卯藏書日記」。最終的には、父母の遺柩は会稽の棲鳧に帰葬している。（「丁巳歲暮書懷」）

³ 『章氏遺書』卷二十八「丁巳歲暮書懷投贈賓谷轉運因以誌別」「丁未（1787）又困京洛塵、選部有官不敢徇」の自注「中道脫館、進退無門。或云、戊戌進士開選、試往投牒。心惴惴恐其得也。冬間已垂得矣、決意捨去」。

放浪生活の前半は主に主講として各地の書院を渡り歩き、後半は主に湖広総督畢沅の幕府に入って幕主のために『湖北通志』『統資治通鑑』『経籍考』の編纂を助けた。いずれにしても席の温まる暇もない慌ただしい生活であった。

「滄雲山房乙卯藏書日記」には、家族をいたわりつつ、かさばる書籍の搬送に腐心し、時には盗賊に遭い、時には険路に苦しむ漂泊の旅をつづけた章学誠の姿が如実に活写されている。ただ年譜が伝える平板な章学誠像を超えて彼の〈生〉の真相に肉薄するためには、彼の主講時代のことを多少精査する必要がある。

そもそも書院主講とはどのような身分なのであろうか。書院の総責任者たる山長については詳細な研究があるが¹、書院主講についてはその実態が明らかではない。戴震が浙東の金華書院の主講を務め、錢大昕が蘇州の紫陽書院に招かれたといった記事を読むと、主講の身分が相当な地位であったように思われるが、それはいずれも歴史と実績を有する著名書院のことであって、章学誠が主講を務めた書院——清漳書院・蓮池書院・敬割書院・文正書院——は、蓮池書院を除いて一級書院ではない。田舎の社学程度の書院ならば、山長の他、正副主講各一人を置き、山長が時文詩賦を教え、主講はもっぱら朱子の『小学』を授け、漸次経傳に進み、かたわら「拜跪揖讓之儀・進退應對之節」を実習する。²ここまで程度が低くないにしても、章学誠が主講を務めた書院も相当なものであった。帰徳の文正書院は、蔵書楼があっても肝心の蔵書がない。試みにどんな書物が有るのかと問うと、明史以外はまったく知らないという有様である。仕方なく城中の縉紳のところまで借りようと思うが、彼等も蔵書というほどの数の書物を持っていない。もうすぐ新学期が始まるうというのに、まだ入学生の選抜も終わっていないので書院は閑散としている。山長はこれをよいことにして遊びほうけている。³

では主講の俸給はいかほどであったのだろうか。これもよく分からない。蒂萊曼・格里姆（Tillemann Grimm）は劉伯驥の『広東書院制度』に依拠して、

¹ TILEMANN GRIMM, *Academies and Urban Systems in Kwangtung*. William Skinner Ed., *The City in Late Imperial China* (Stanford University Press, 1977) .

² 盛康『皇朝経世文統編』「上某兵備論治台書」同治八年条。

³ 『章氏遺書』卷二十二「与洪稚存博士書」。

十九世紀七十年代の広東の主要書院の年間経費と支出を算出している。¹それによると、一般的には山長の招聘金と学生の奨学金がそれぞれ年予算の30%から40%を占め、残りの20%から40%を学監の招聘金、耆縉の費用、学生の郷試会試参加費、等に充当される。おそらく主講の経費は耆縉の費用に含まれるのであろう。広東惠州府の豊湖書院の例を挙げれば、年間予算800両から1000両、山長の招聘金400両、130名の学生の奨学金400両、学監の年俸は現物支給で40担穀子。依然として主講の俸給額は定かでないが、山長と較べると格段の差があったことだけは確かである。章学誠ならずとも主講の身分を脱して山長になりたく思うのは当然である。嘉慶元年(1796)、章学誠は国子監時代の師朱筠の実弟であり、安徽巡撫であった朱珪を安慶に訪ねつぎのような文章を奉っている。章学誠の書院山長への熱い思いが赤裸々に吐露された資料である。²

当時、章学誠は湖広総督畢沅の幕府に入って『史籍考』の編纂に従事していたのであるが、湖北で白蓮教徒の起義が出来たので、畢沅はその鎮圧に忙殺され、結局、彼の幕府は一事活動を停止せざるを得なかった。当然、幕客の収入の途は絶たれる。彼は恥も外聞も捨てて「今則借貸俱竭、典質皆空、万難再支、祇得沿途托鉢、往来於青徐梁宋之間、惘惘待儻来之館穀、可謂億矣」と窮状を訴えた。しかしいまさら家庭教師(館穀)や主講の地位では生活ができない。「聞くところによれば、河南の大梁書院、直隸の蓮池書院の現在の院長は喪に服しており、ポストが空いているということであります。なにとぞ閣下のお力で山長に推挙していただけないでしょうか。直隸総督の梁肯堂様はかつて直隸布政使をされていた際、蓮池書院の主講を勤めていた私の上司に当たるお方です。お別れしてからも私のことを気にかけて下さったと聞き及んでおります。また河南布政使の吳璣氏は私とは郷試同年の間柄であり、友誼に厚い人物であります。どちらもかなり脈があると考えております。特にこの点をお伝えしておきたいと思っております。」正直というか芸がないというか、章学誠の不器用(頭巾気)さがそのまま露呈した文章であ

¹ TILEMANN GRIMM, *Academies and Urban Systems in Kwangtung*. William Skinner Ed., *The City in Late Imperial China* (Stanford University Press, 1977) .

² 『章氏遺書』卷二十八「上朱中堂世叔」。

る。「閣下護持之功、当不在弇山制府（畢沅）下矣」と朱珪に追従しているが、大梁書院にも蓮池書院にも山長推挙が実現しなかったのは言うまでもない。

八、幕友生活

時期は前後するが、書院の主講として糊口をしのぐ以外に、章学誠は知県・知府あるは道臺レベルの地方官のために方志を編纂することで生計を立てていた。はたしていかほどの収入が得られたのか不明であるが、「茲則馳驅半載、終無所遇、一家十五六口、浮寓都門、嗷嗷待哺、秋尽無衣」¹と座師の梁国治になりふり構わず生活援助を訴えているのを見ると、方志編纂のアルバイトだけではやっていけなかったことだけは確かである。乾隆四十七年壬寅、永平の敬勝書院の主講となるべく京師を去ってから、同五十五年庚戌、武昌の畢沅の幕府に迎えられまでの九年間の総収入は「二万金」であったという。²当時、七品官の知県の固定収入は、俸禄銀45両、俸禄米22.5石（銀17両に相当）、養廉銀——赴任地によって異なるが、最高2000両（河南・山東）から最低400両（貴州）まで——があり、総計すると、最低で462両、最高で2062両となる。³これと比較すると、章学誠の年収2222両余という数字は低いどころかむしろ高収入であると言わねばならない。にもかかわらず切々と生活苦を訴えているのはなぜであろうか。妾を含む係累二十口を携えての放浪生活を維持するにはこれでも十分ではなかったのであろう。それではなぜ一カ所に、たとえば郷里会稽に、定住しようとしなかったのであろうか。宗族の紐帯と相互扶助を説いた章学誠にすれば、生活の安定を求めるのは章氏宗族の郷里会稽しかなかったはずである。とすれば、故郷に帰ることのできない何か深刻な理由があったのであろう。年譜や伝記作者とともに、私もその確たる理由を見出すことができないでいる。

章学誠はまた生活のために売文にも励んだようである。「作文之勤、多在秋尽冬初、灯火可親、節序又易生感也。平日所負債、亦每至秋冬一還。然終

¹ 『章氏遺書』卷二十九「上梁相公書」。この書卷は乾隆四十四年のもの。

² 『章氏遺書』卷二十八「丁巳歲暮書懷」自注。

³ 張仲礼『中国紳士の収入』（上海社会科学院出版社、2001年）8-11頁。

未能悉掃無余。性命之文、尽於通義一書、今秋所作、又得十篇、另編專卷。蓋涉世之文与著作之文、相間為之、使其筆墨略有變化。此既盈卷、彼亦成巨冊」。¹人の求めに応じて状誌碑銘の「涉世之文」をせっせと書き続けた。その分量は章氏遺書のかなりの部分を占めている。²では一体、潤筆料はいかほどであったのだろうか。袁枚のような著名文化人とは比較することはできぬが³、ここに格好の資料がある。同郷の後輩である李慈銘の記すところによれば、彼の潤筆料は散文の廟銘・神道碑は百六十金、駢文で綴れば二百金、墓碑銘は散文百二十金、駢文百六十金、知友の関係であれば散文は四十金を、駢文は六十金を減額する、とある。⁴同じく不遇知識人であるとはいえ、章学誠の零落ぶりと社会的地位から推して、李慈銘ほどの潤筆料を依頼主にふっかけることはできなかったはずだし、そんな小器用な商才など持ち合わせていなかったであろう。さらに章学誠自身、売文行為について後悔の念を漏らしている。「去冬力償旧逋、撰述誌傳、動成卷軸。文筆豈無小有可取、終恨歲月坐荒、不得專力著作、以枉用其精神」。⁵彼の畢生の著述となるべき『史籍考』の編纂に没頭しなければならぬ大事な時期に、世過ぎのためとはいえ諛墓の文などに手を染めねばならない自分に嫌気がさしたのである。このような章学誠の窮状を一挙に打開してくれるはずであったのが畢沅の幕府であった。

乾隆五十二年（1785）冬、周震栄の紹介により河南巡撫であったに畢沅に謁したのが最初の出会であった。「公愛士尤篤」⁶と賞されるほどに畢沅は有為の人材を好み、巡撫の官署に孫星衍・洪亮吉・邵晋涵・凌廷堪・武億・

¹ 『章氏遺書』卷二十九「跋戊申秋課」。

² 族譜について一家言を持っていた章学誠に、宗譜や族譜の整理編集を依頼する求めが多かった。これも彼の収入源の一つであったと思われる。「吾入徐学使幕、為之整頓家伝、徐君奉使以来、勇任文辞、見所草伝不当其意。遽自改削、然吾一語可協文律。吾謂吾文豈如咸陽懸金、一字不可増減、然求文從字順者也」（『章氏遺書』卷二十九「論文示貽選」）を見よ。

³ 『随園老人遺囑』に「売文潤筆、竟有一篇墓誌送至千金者」とある。

⁴ 一、廟碑、神道碑、散文一百六十金、駢文二百金。如至戚深交而家非有力者、散文減四十金、駢文減六十金。

⁵ 『章氏遺書』卷二十九「与孫淵如書」。

⁶ 洪亮吉『厚生齋文甲集』卷四「書畢宮保遺事」。

銭坵・方正らの学者を集め金石校勘の事業を進めていた。「鎮洋太保人倫望、寒士聞名氣先壯」と予期したとおり、畢沅は章学誠を遇すること厚く、彼を帰徳の文正書院の主講に推挙してくれた。章学誠はこれによって「解推遽目前困、迎家千里非逶迤」¹と生活が好転することを喜んだが、先に述べたように文正書院の教育環境は劣悪で一年余りでそこを辞去している。結局、このたびの畢沅の推挽は経済的にはさしたる益はもたらさなかったが、畢沅の援助のもと、章学誠を主幹とする『史籍考』編纂の大事業が行われることになったのは、章学誠にとって人生の一大転機となった。以後、彼の人生は『史籍考』編纂に捧げ尽くされた観がある。

乾隆五十五年（1790）、章学誠は湖広総督に就任した畢沅の武昌の官署に赴き、『史籍考』『続資治通鑑』『湖北通志』等の編纂に携わり、畢沅が山東巡撫に降格された一時期をのぞいて、嘉慶二年（1797）、畢沅が湖北辰州の教匪討伐の陣中に没するまで、彼の経済生活と学究生活は畢沅の寛大なる扶助のもとに成り立っていたのである。しかし章学誠はこの境涯に決して満足していなかった。「僕游楚、本為帰山之計、無如楚宦清苦、未得遽遂所求」²と幕客の身分はあくまで仮の姿であると言い、「此游所得、以視得意官途、未足以当百一」——畢沅ほどの顯官の幕府に迎え入れられたとしても、官途に就いた者と較べるなら、幕客の生活はその百分の一にも満たないと不平を鳴らしている。その一方で、「而儕輩中出宰百里、百憂万慮、終身不得寧謐、而并此十畝三椽、且不能得者則比比矣。以此自遣、且以為知我者慰」——幕友の中には、知県になって死ぬまで苦勞するだけでなく、わずかな不動産さえも維持できなかつた同輩がいることを思えば今の身分で満足すべきであると正直な心情を吐露している。ちなみに畢沅が湖広総督であった時期の幕客には、江声・梁玉繩・汪中・鄧石如・史善長・胡虔・臧庸、等がいるが、章学誠の言う「儕輩」が誰を指すのか定かではない。

当時の幕客の報酬は年五百金が相場であり、これだけあれば「中士」（普通の知識人）の体面を保つだけの十分な生活が可能であつたらしい。³そして

¹ 『章氏遺書』卷二十八「丁巳歲暮書懷」。

² 『章氏遺書』卷二十九「与王春林書」。

³ 「今幕中歲給五百金、中士得之、足以仰食終身矣」（『章氏遺書』卷十七「蔣南河先

この程度の生活資金なら畢沅から支給されていたはずである。それどころか、畢沅は『史籍考』と『湖北通志』が完成した暁には隠居生活の資金まで援助しようとして約束してくれていたのである。¹しかし章学誠という男はどこまでも不運であった。一縷の頼みであったその畢沅も『史籍考』と『湖北通志』の完成を見ずして世を去った。章学誠は畢沅に代わる寄生先を早急に求めねばならない。嘉慶二年（1797）五月、揚州に赴き兩淮轉運使の曾燠の幕府に入ろうとした。曾燠の幕府は世に名高い詩人幕府である。その幕下には、吳錫祺・王芑孫・吳鼐・劉嗣綰・吳嵩梁・樂鈞・彭兆蓀・陸繼輅・毛岳生・吳照・吳煊、等の詩人が集まっていた。章学誠はその乏しい詞藻を操って「丁巳歲暮書懷投贈賓谷轉運因以誌別」一首を曾燠に投じ、幕下に入らんことを求めた。「丁巳歲暮書懷」には「側聞方志許參校、抵掌伸眉欲函效」と、曾燠が方志編纂を企画していることを聞き及んだと記しているが、盧見曾の文事を慕う曾燠がはたして方志編纂などという無粋な事業に手を染めようとしたとは考えにくい。ともあれ「啓苓兔絲約、吳石魚桐扣。青霜豐鐘鏗、紫氣匣劍掄」、興の修辞を駆使して苦心慘憺して書き上げたこの長編詩は、章学誠自身が語った伝記資料であるということ以上の価値はない。無骨なだけの干謁詩は曾燠とその幕下の詩人の心を惹きつけることは決してなかった。

この四年後、章学誠は貧窮の内にその六十四年の生涯を終えた。

九、近代の予兆と挫折

以上、章学誠の足跡をおもにその経済活動（要するに世過ぎの手段）に着目して辿ることにより、乾嘉期知識人の典型的な<生>の一端を提示しようと努めてきた。本論冒頭でも述べたように、章学誠の思想は、十八世紀後半の清朝乾嘉期に特有の思想的社会的諸条件を母体として生まれ出たものであったが、しかし時代の制約と環境を突き破り、今日のわれわれ——その中には外国人である筆者も含めて——の知的関心を大いに刺激してやまない魅力と訴求力、そして現代の人文科学（human science）の中で十分検証するに足る有効性と理論的射程の広さを内に秘めていた。筆者はこの点をとらえて章

生家伝)。

¹ 「畢公許書成之日、贈買山資」（『章氏遺書』卷二十八「丁巳歲暮書懷」自注）。

学誠の思想は近代を予兆していると断じたのである。しかし章学誠の思想の近代性(modernity)は彼の生活から帰結するものではなかった。むしろ章学誠が蛇蝎の如く忌み嫌った袁枚の快樂主義(epicureanism)、あるいは同時代の焦循や錢大昕の穩健な欲望肯定論、言い換えれば近代社会のメルクマールである個人主義(individualism)は主として江南諸都市の富裕な經濟生活をおもな要因として生まれでてきたものであったという点で、彼等の思想の理解は比較的容易である。だが章学誠の場合、社会的に個として自立した人間のあり方よりも、むしろ強固な宗族の紐帯の中で共同生活を営むことを以てよりよい生き方と見なし、また江南の豊かな都市生活をまるで忌避するかのようにして河北・河南・湖北・安徽の地方小都市を転々として漂泊の人生を送った。おそらくこのような彼の人生と生活から「個の覚醒」といったような近代性の萌芽を読み取ることはおよそ不可能であろう。

結論を急ごう。章学誠は乾嘉期知識人の<典型>であった。むしろ近代を予兆していた袁枚、焦循、錢大昕、洪亮吉らは江南諸都市の繁栄が生み出した知識人たちであり、彼らはみずからの言説を通して都市の繁栄を代弁する者たちであった。そしてあくまで当時の社会にあっては少数のイデオログにすぎなかった。他方、江南都市を海の如く圍繞する圧倒的大多数の農村社会(非都市化地域)では、反都市の言説¹あるいは宗族の言説が権力言説として社会の隅々にいたるまで浸透していた。すなわち乾嘉期の知識人の大多数は、程度の差はあるが、結局は理念型「章学誠」と同質の存在であったのである。まさに当時の社会の権力言説を握っていたのは「章学誠」——思想において近代を先取りしているが、生活と意識において前近代的である——であって、江南の進歩的知識人たちではなかった。つぎのように言い換えてもよい——前近代の乾嘉期中国社会の支配的イデオログの中でもっとも近代性(modernity)に接近し得たのが章学誠であり、その章学誠にしてなお前近代

¹ 筆者が「反都市の言説」と呼ぶのは、明清以降の知識人に顕著な都市文化の否定、都会生活の拒絶、といった特有の言説形態である。実際の行為として、彼等が都市生活を忌避したわけではない。南京・蘇州・蘇州の狭斜に足繁く通り、蔵書楼や書肆等の都市だけが持つ利便性を大いに享受した。にもかかわらず、彼等筆下の都市生活は、まるで旧約聖書の墮落退廃したバビロンのごとくに描かれるのが普通である。

の残滓を多く引きずっていた——と。十八世紀後半の中国思想史は章学誠という名の輝ける「近代の予兆」を擁したことを誇る一方、前近代の影を深く宿した多数派としての「章学誠」に阻まれて近代化の「挫折」を経験しなければならなかったのである。